



# 保育園安全だより

—事故報告よ—

令和 4年 4月～6月



新年度がスタートして3ヵ月が経ちました。コロナ感染も徐々に落ち着きを見せていますが、今後、状況が変わることも予想されます。その中で、子ども達の遊びは範囲も広がり活発な動きもみられていることと思います。新しい環境の変化の中で、事故が起こりやすい時期でもあります。これまでのヒヤリハットを見直し、安心安全な保育につなげていきましょう。

令和4年度 事故報告書集計（4～6月）												
	園内								園外			
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	その他	道路	公園	その他	計
0歳児	8	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	10
1歳児	20	0	1	0	1	3	0	0	0	1	1	27
2歳児	17	4	0	0	0	2	15	0	0	0	1	39
3歳児	10	8	1	0	0	2	16	0	0	1	1	39
4歳児	10	3	1	0	1	7	14	0	0	1	0	37
5歳児	8	2	1	0	0	1	12	0	0	2	1	27
合計	73	17	4	0	2	17	57	0	0	5	4	179

＝安全保育 リスクを軽減するために＝

## 【保育環境の見直しについて】

園舎の内外の環境についての安全点検は十分でしょうか。門扉の鍵の破損が原因で、子どもが門扉をくぐり抜けてしまった事や、保育士が目を離したすきに柵を乗り越えて外に出てしまった事例がありました。常に安全点検を行い、迅速に修理点検や人数の確認をすると共に、保育の見直しをして職員で共有して未然に防いでいきましょう。

## 【リスクマネジメント研修】

6月に「リスクマネジメント研修」が実施されました。

これまでの「想定外」であった状況を想像する。「もし・・・であったら」を考えながら、想定外のリスクについて想定し、あらかじめ事故防止の対策を考えることがリスク委員の役割です。（大阪公立大学 関川芳孝教授）

重大事故につながらないために、リスクマネジメント委員会を中心に全職員間で話し合い、自園のヒヤリハットを検証していきましょう。

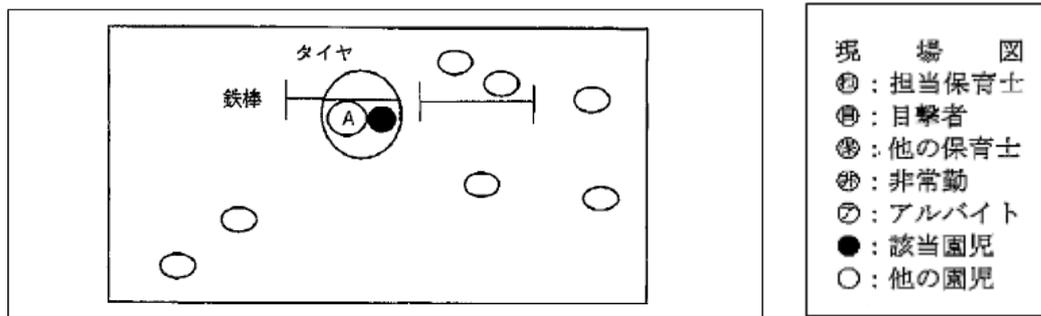
## 【怪我時の保護者への伝える方法について】

【事例1】 5歳児 発生時間 16:15

〈発生状況〉

夕方園庭で3・4・5歳児と一緒に遊んでいた。該当園児と園児Aは、背の高い鉄棒の下にタイヤを二つ重ねて、前回りや逆上がりをして遊んでいた。担当保育士が、他の園児の様子を見に行くのにその場を離れるため、鉄棒で遊ぶのを止めタイヤの上で待っているよう声をかけた。タイヤの上に2人で座っていたため、その場を離れ、少し経ってから鉄棒に戻ると、該当園児の歯と園児Aの頭がぶつかってしまった。受傷したところを確認し、異変はなかったため、そのまま経過を見て、お迎え時に母に詳細を伝えた。次の日、母からその日の夜に家で歯を痛がり患部を見たところ歯茎が変色していることに気付いたと聞き、すぐに受診をした。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

鉄棒から担当保育士が離れることで園児2人は鉄棒で遊ぶことはやめていたが、タイヤの上で待っていたため、狭くぶつかりやすい状況になってしまっていた。

〈その後の改善策〉

タイヤの上はバランスがとりにくく、その上に2人では狭いため、遊ぶ時には大人がそばについていく。また、鉄棒をするために待っている状況の時には、間隔をあけて待つこと、タイヤから降りて待つなど、ぶつからないようにし園児にも気を付けるように事前に声をかけていく。

この事例は、園庭の鉄棒の下にタイヤを2つ重ねて置いて、そこに2人で乗っていた時の事故でした。受傷した際は、異常が見られなかったので受診せずに降園。帰宅後に痛みが出たため、翌日に受診したというケースです。しかし翌日、保護者が事故当日のお迎えの際の説明内容に疑問を感じていたことがわかりました。保護者に、詳細がしっかり伝えられるように職員間で発生状況を引き継ぎすること、又、引き渡しの際には、職員と保護者とで怪我の状況を確認しながら丁寧に事実が伝えられるようにしていきましょう。

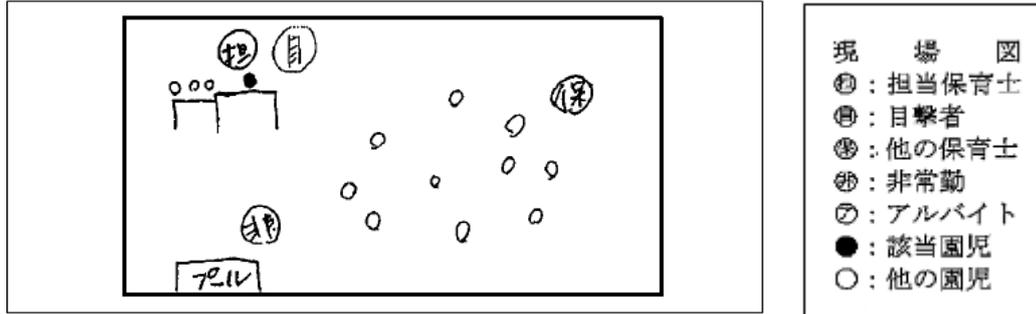
## 【新しい環境の中での保育】

【事例 2】 4 歳児 発生時間 10:00

〈発生状況〉

4 歳児 18 名と保育士 2 名、非常勤 1 名で園庭に出て遊んでいた。男児中心に 10 人ほどで氷鬼をしており、女児 4 名が 2 つの鉄棒で遊んでいた。該当園児は高い鉄棒で何度か前回りを保育士に見せていた。再び、前回りをした時に回る際の勢いがついてしまい、うまく着地したものの、その勢いでおでこを鉄棒のバーにぶつける。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

新年度でクラスが変わり、担任として個々の能力の見極めを見誤ってしまった。新任職員との保育で、全体を把握する立場でありながら、子どもたちのやりたいという気持ちに応えようとして、鉄棒を出してしまった。又、子ども自身が回る際のスピードの調節や力加減などをコントロールする力は、未熟であるのに、声かけや、着地の際の方法（ゆっくり降りるなど）を伝えていなかった。

〈その後の改善策〉

クラスが慣れてくるまでは、あそびの設定を見守れる範囲で行い、あそびの内容を時間で区切るなどしながら、それぞれのやりたいことができる環境を整えていくようにする。鉄棒をする際の着地や、バーの握り方等、子どもたちへも安全にあそぶ為の方法を知らせていく。

新年度が始まり、2 日目の保育でした。担当クラスの園児の把握がままならない状況の中で、子どもたちの要求に応じて鉄棒を出したところ、事故に至りました。進級して担任が変わったり、子どもたちの生活の場が変わったりしている中で「新年度の保育について」や「保育環境」についても再度、職員全体で話し合っておく必要があります。具体的には、鉄棒を出して遊ぶということが、新年度にふさわしい遊びであったのか、又、子どもたちの遊びの全体把握が出来るような保育士の立ち位置、新任保育士と保育を進めていく際の注意点なども職員間で検証しましょう。

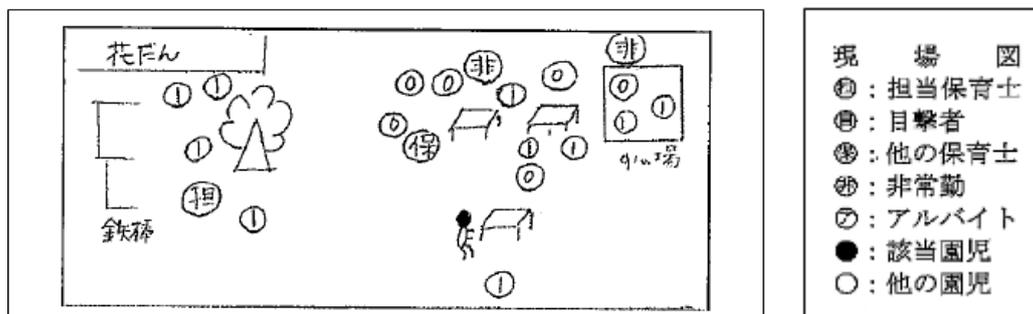
## 事例（１）

[診断名] 裂傷

[発生日時] 令和4年1月14日（金） 午前10時20分頃

[クラス・性別] 1歳児クラス （ 女児 ）

[現場図]



[事故発生状況]

園庭で該当園児は設定したテーブルと外用椅子(お風呂用)に座り砂遊びをしていた。保育士が該当園児が泣き出したので側に行くと椅子がひっくり返っていて、側で転倒していた。頭や、手、足などを見たが本児も痛がっていなかったため、怪我をしていることに気が付かず、その後20分ほど園庭で遊びクラスに戻り、おむつ替えのときにおむつに出血があり気が付いた。

[応急救護処置の内容]

傷を確認し、清浄綿で拭き滅菌ガーゼをあて止血した。



[事故原因・問題点]

該当園児が転倒する直前に側についていなかったため、すぐに対応ができなかった。転倒後、頭をぶつけたと思い込み、受傷した部位に気がつかなかった。

[その後の改善策]

園庭での子どもの遊びの様子、位置などの全体把握をしていく。転倒や打撲などけがをした際には、身体全体の怪我の有無を確認する。

[園長意見]

園庭で遊び該当園児が動いたときに目撃が出来なかったことでの事故である。そのことで発見が遅くなりすぐの対応ができなかった。痛みがなくても、身体に異常がないか確認していく意識をもつことと次への動作の時にすぐつける場所や、予測をしての保育をするよう職員全体で周知確認をした。

～看護師のコメント～

(陰部をけがした場合の受診科について)

- ・特に乳児は、転倒したときに、どこが痛いか上手く説明できないことがあるため、全身の観察や経過を追って観察することが必要です。今回は、オムツ交換時に陰部の出血に気付いています。陰部のけがは、男児は、

泌尿器科、女兒は、婦人科の受診がおすすめですが、あらかじめ病院に連絡して小児を診てもらえるか確認しましょう。成人専門で診てもらえない場合は、園医や小児科に連絡し、診てもらえるか相談しましょう。そのために、日常、受診する病院のリストには、小児科も入れておくことが大切です。

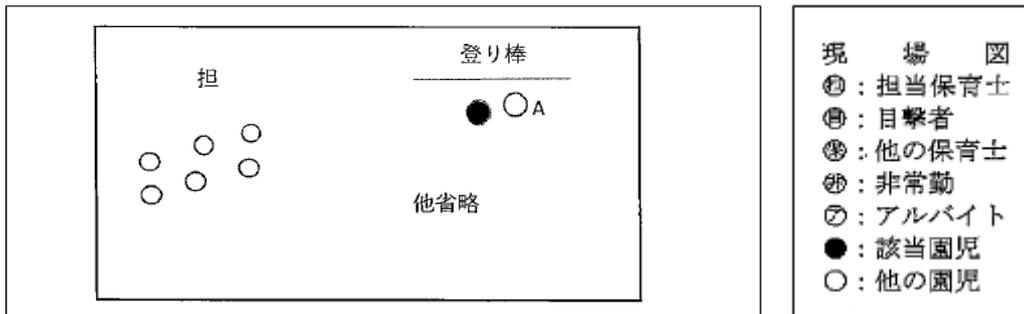
## 事例（２）

[診断名] 鎖骨骨折

[発生日時] 令和４年３月１１日（金）午後４時３０分頃

[クラス・性別] ４歳児クラス（男児）

[現場図]



[事故発生状況]

該当園児と他児Aが園庭を走っていて、正面からぶつかり該当園児が地面に前向きに倒れる。

[応急救護処置の内容]

冷やす



[事故原因・問題点]

中あてをされていて、保育士が線を描き直している間に、該当園児は、瞬間的に走り始める。走っていた２人共が勢いがあり、止められずにぶつかってしまった。気持ちの高揚があるまま走り出した。通常は、５歳児も園庭にいるが今日は、いなかったこと、また午前卒園式があったので、その開放感もあったように感じる。

[その後の改善策]

該当園児の動き方を考え、中あての合間は座って待つようにする。ぶつかった児も勢いよく、走ってしまう児なので、周囲を見て走ることをクラス全員に確認する。

[園長意見]

- 改善策にあるように準備が終わるまで園児は、テラスで待つ。それだけで小休止になり気持ちが落ち着くことがある。さらに、他児とぶつからないように気を付けることを伝えるとよい。園児の姿を見て予測し、丁寧な保育

が必要である。

- ・ 該当園児が保育室に戻ってからの様子を見ると不自然な動きがみられたことと、左肩のほうが、少し下がっていたので、受診を決めたがよかった。

～看護師よりコメント～ <園庭で転び鎖骨骨折をしたケース>

骨折が疑われるときの応急処置として以下の4点があります。

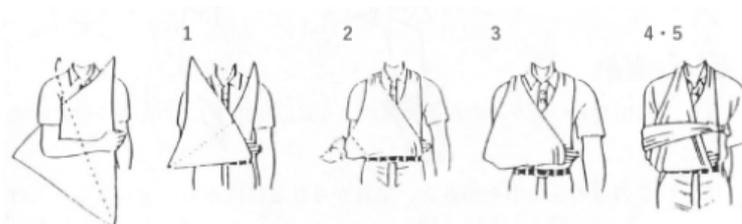
- 1 冷やす
- 2 安静を保つ（可能なら心臓より上に挙上）
- 3 添え木になるものを当て包帯や布で固定する
- 4 肩、肘、腕の場合、三角巾で支える

事例では、肩をぶつけて痛がっているので三角巾で支えることが必要です。ただし乳幼児の場合固定は無理のない範囲で行うことが大切です。

毎年職員向け救命救急講習で三角巾の使い方について講習していますので、研修に参加した人が中心となり園内で職員研修を行い共有するとよいでしょう。

#### ア. 腕の固定

1. つる腕と三角巾の底部の部分が並行になるようにし、つる腕の手を胸に当てる。
2. 三角巾の下の部分を図のようにつるす腕を包んで折り曲げ、肩にかけ、肩の後ろで結ぶ。
3. ひじにある三角巾の頂点は腕の長さに合わせて結び、内側に入れる。
4. 三角巾が2枚ある場合は、もう1枚の三角巾で体に固定する。
5. 指先は血液の循環を確認するために、覆わないで少し出しておくようにする。



\*三角巾以外でも、日用品を使用し簡単にできる応急処置があります。

インターネット検索で視聴できますので活用してください

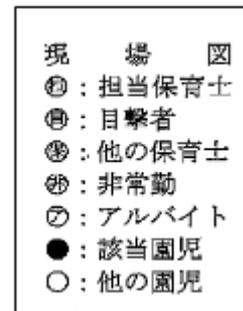
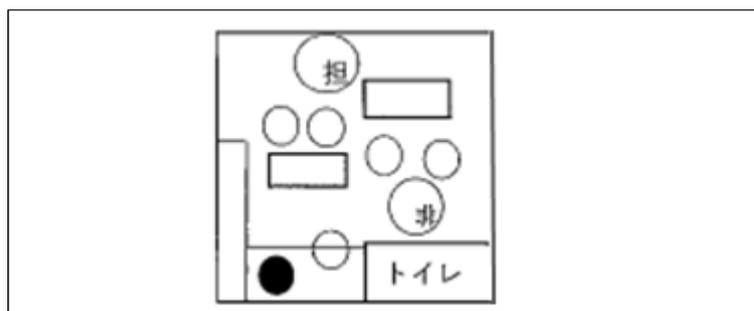
#### 事例（3）

[診断名] 刺し傷

[発生日時] 令和4年3月9日（水）午後5時40分頃

[クラス・性別] 2歳児クラス（男児）

[現場図]



#### [事故発生状況]

(当日) 2歳児保育室の遅番保育中に押入れ下でブロック遊びをしていた該当園児が急に「痛い」と言ったので、すぐに確認をする。指先を見ると小さな穴があり、何か刺さったと予測された。手当後すぐに押入れの下を見ると、大きなホチキスが片方だけ取れた状態になっており、指に刺さったとわかる。(5日後) 様子を見ていくことを家庭とも共有していたが、5日後に絆創膏をはがして血豆のようになって痛がる姿があったため、保護者(父)に受診することを伝える。翌日登園時に受診の依頼を受けた。

#### [応急救護処置の内容]

気づいた時に小さく出血していたところを流水でよく洗う。



#### [事故原因・問題点]

子どもが遊ぶ場所の安全確認・環境整備が足りなかった。

#### [その後の改善策]

見えない場所の環境などをしっかり確認する必要がある。

#### [園長意見]

保育室の環境を日々しっかりと確認していくことが必要であり、今回は押入れの下の子どもたちが好んで遊んでいる場所の点検がなされていなかった。子どもの目線になって保育環境を整備していくことの必要性を周知した。けがの経過をしっかりと担任が把握したことで、保護者の思いに気づき(化膿しているのでは?と感じていた)5日後の受診となったが、怪我の経過をしっかりとみながら、保護者と怪我の経過を共有していくことの大切さも周知した。

#### ～看護師よりコメント～

受傷後、傷の状態や経過をよく観察し、職員間、家庭と共有していくことが大切です。

絆創膏を貼ったままにしておくと、傷の状態を観察できない上、傷や周囲の皮膚が白くむくみ、正常な修復が阻害され悪化してしまうことがあります。絆創膏は一時的な保護材ですので、園でケガなどして貼った場合は、当日、入浴時等にはがして傷の状態を確認するよう保護者、園児へ声かけしていくことが大切です。園では翌日に傷の状態を必ず確認し、経過を観察しましょう。

# 保育園安全だより

—事故報告だより—



令和 4年 7月～9月分



今年是不安定な天候が続き、コロナや熱中症対策も含めて園児の体調管理にいつも以上に気遣われた事と思います。7～9月に発生した各園の事故総数214件でした。これから戸外遊びが充実する季節ですので 各園リスクマネジメント力を高めて予防に努めていきましょう。

令和4年度 事故報告書集計（7～9月）

	園 内									園 外			計
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	プール	その他	道路	公園	その他	
0歳児	11	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	14
1歳児	37	1	1	0	0	3	8	0	0	0	0	0	50
2歳児	28	4	0	0	0	5	5	0	0	0	0	0	42
3歳児	19	3	1	0	1	1	9	0	0	1	0	0	35
4歳児	14	2	0	0	0	2	12	0	0	0	1	0	31
5歳児	13	7	0	0	0	0	20	0	0	1	1	0	42
合計	122	17	3	1	1	12	54	0	0	2	2	0	214

## 【保護者への伝達と信頼関係について】

これまで提出のあった、事故報告書の中で「保護者への伝え方」により事態が、こじれてしまった事例が何件か記載されていました。

例1) 担任より事故状況を引き継ぎ、遅番職員が保護者に伝えたが、帰宅してから違和感を持ち、次の日園長に相談があった。

例2) 目撃者である担任が状況を伝えたが、怪我をさせられたと感じた母が父に伝えると、翌日父が電話で訴えてきた。

保護者により受け止め方は様々ですが園側の謝罪の気持ちを込めつつ事実を伝える事。又、表現のあいまいさが不信感を与えてしまうので、状況説明のできる目撃者が丁寧に伝えることが大切です。

目撃者以外の職員が引き継いだ際は、詳細を記録したのを見て伝え、園内で検証した結果の改善点を加える等、保護者の状況により、どのような伝え方がよいのかを職員間で話し合ってみましょう。特に怪我に対して敏感に反応し、「すぐ連絡が欲しい」「またですか」などと心配や違和感の声が上がった際には、より慎重に対応していくことが望まれます。もちろん日頃からの保護者とのコミュニケーションは必須です。保護者と共に子ども達の出来事や成長を共有し、互いに理解を深めることを大切にしていきたいと思います。

## 【子どもの好きな遊びを見つける】

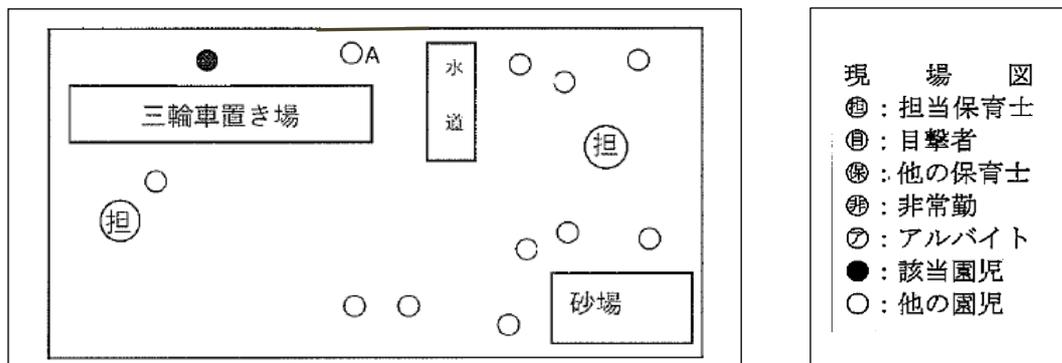
【事例1】 5歳児 発生時間 11時50分

〈発生状況〉

園庭で遊んでいた時、該当児と他園児2名がスターウォーズごっこ（追いかっこ）をして遊んでいた。該当園児と園児Aが三輪車置き場の狭いところに正面から逃げ込んだ際に園児Aの肘が該当園児の口元に当たる。

遊びに夢中だった該当園児は、その瞬間に口元を気にすることもなく、遊びを続けていた。ぶつかった瞬間を保育士は目撃できていなかったが、室内に帰ろうとした際に該当園児から「そういえば、さっきぶつかって口が痛い」と申し出があったため、口元を確認すると歯茎から出血が見られた。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

保育士の目がはなれているところでの事故となってしまった。ごっこ遊びが楽しくなっているものの、戦いのイメージが強くなってきて表現が大きくなりすぎてしまう姿も増えている。そんな中で、園庭の狭いところに逃げ込んできた際に事故が起きてしまった。保育士の目が離れていた場面でもあったため、大人のつく位置に留意していく。



〈その後の改善策〉

ごっこ遊びが激しくなってしまうことも予測しながら、保育士も一緒にイメージを共有し、遊びに危険のないよう、子ども達とともに楽しんでいくようにする。また、走る場所の再確認やごっこ遊びをする際の、遊び方を子ども達と一緒に考えていく。動きも大きくなってきているため、散歩など大きく身体を動かせる機会を増やせるようにする。

ごっこ遊びがエスカレートしている中で、保育士の目が離れた時に怪我が起こったケースです。ごっこ遊びは、様々に楽しさを味わうことの出来る体験であり、それを成長過程の姿として捉えることができます。しかし、盛り上がり過ぎると怪我につながることもあり、危険を見極めて止めるか否かの判断が必要になります。エスカレートした遊びを、徐々に力加減をコントロール出来るようになることを見守りつつ、一方では、遊びのルールを子ども達と話し合っ決めて、ルールを守ることを伝えていくことが大切です。一人ひとりがどんな遊びが好きなのか、何に興味があるのか、やってみたい遊びを見つけられるよう保育環境を整えていきましょう。

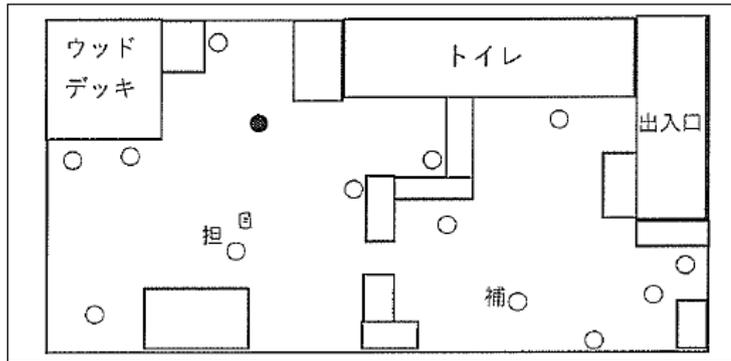
## 【土曜日保育について】

【事例2】 1歳児 発生時間 9:30

〈発生状況〉

2歳児保育室で乳児6名、幼児8名で過ごす。園庭に出る準備をするために室内の玩具を片付け始め、保育士は受け入れ後泣き続けている園児を抱えながら動いていた。該当児はその場を立ち上がり、保育士に駆け寄ろうとして小走りをして転倒。手をついて転倒するが口も床にぶつける。すぐに様子を見ると左上口唇と歯茎からの出血が見られた。冷やしたタオルで冷やししながら止血し受診する。

〈現場図〉



現 場 図

- ⊕ : 担当保育士
- ⊙ : 目撃者
- ⊗ : 他の保育士
- ⊖ : 非常勤
- ⊕ : アルバイト
- : 該当園児
- : 他の園児

〈原因・問題点〉

- ・ 周りの雰囲気につられて、動きが大きくなったり転びやすくなったりしやすい、という該当園児の特性を把握していたが、傍を離れる状況になってしまった。
- ・ 安全を確保できない中で室内の片づけを始め、泣いている児の対応をしてしまった。後から来る保育士を待ってから動き始めるべきであった。
- ・ 保育士と補助員が同じ動きをし、配慮ができていなかった。



〈その後の改善策〉

- ・ 転倒しやすい児には傍に保育士が必ず付くようにする。
- ・ 場面の切り替え時に保育士の人数、位置を把握し、声掛けをして動くようにする。
- ・ 遊びの設定を事前から行い、部屋を区切って安全な環境の中で遊びを展開するようにしていく。

この事例は土曜日の朝9時30分に起きた事故の事例です。この日の出席人数は乳児6名、幼児8名で、保育士は経験年数2年目の職員と補助員の2名で保育をしていました。この事故が起きた一番の原因・問題点は、泣き続けている児を抱えながら他児の様子にも目を向け、片づけをしなければならなかった保育士の動きも含め、土曜日保育の職員体制に問題があったと思います。「保育を第一に」考え、保育士の人数配置や若手職員へのフォロー体制はできているかという点についても検証をして、今後の改善策に結び付けていくとよいでしょう。

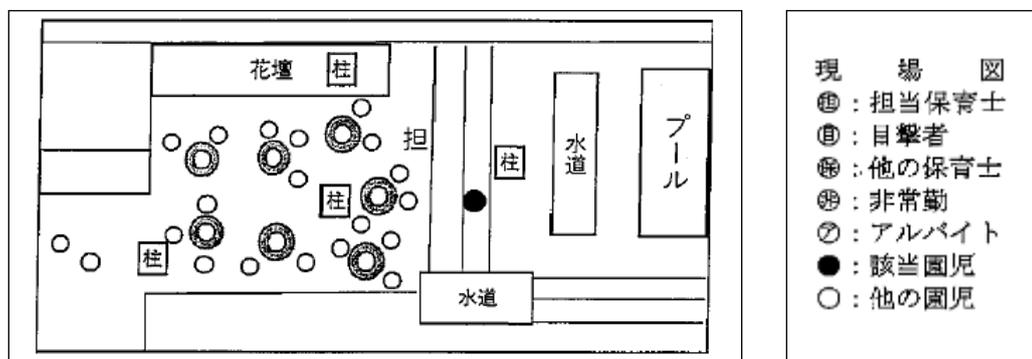
## 事例（１）

[診断名] 右足底 虫刺症

[発生日時] 令和 4年 7月 5日(火) 午前 11時 15分頃

[クラス・性別] 5歳児クラス (男児)

[現場図]



[事故発生状況]

5歳児保育室からテラスに出て水遊びを始めた。タライの周囲に子どもが数人ずつしゃがみ込んでおり、該当園児は柱の向こう側のタライに移動するため、階段を登って行こうとしたところ、「いてっ」と声を出す。右足をあげると、枯れ葉と一緒に瀕死状態の蜂がいた。

[応急救護処置の内容]

流水で患部を洗い、針の刺さった傷口を確認する。針を抜いて、絞り出すように流水で洗う。レスタミン剤を塗り、タオルで冷やす。

[事故原因・問題点]

- ①子どもたちは、蜂に気を付けて距離を取るなどしていた。しかし、階段部分に街路樹の落ち葉が数枚落ちていて、床にいる蜂を認識しづらくなっていた。
- ②以前から水を求めてプール周辺に飛んでくるので、蜂の苦手なハーブを育てていたが、十分ではなかった。



[その後の改善策]

- ①水遊びを始める前に点検をして、異物や虫などはすべて取り除く。蜂が飛んできて発見しやすい環境にする。
- ②蜂が苦手なハーブの香りや線香等を利用して、さらに対策をする。

[園長意見]

今年度に入り蜂の怪我が1件あり、蜂が好まないミントを育て始め、子どもたちへも注意を促していた。蜂は自然のことで、対応の難しさがあるが、その都度安全な環境も確認し、またより効果的な対策を講じていく。

～看護師のコメント～

ハチに刺され、適切な処置から受診へと対応した事例です。

ハチの被害を防ぐためには、改善策にもあるように、遊び前の環境点検が重要です。全職員で共有し、実践しましょう。

また、ハチをみかけたらどのような行動をとるか、事前に子どもたちと確認しておくといでしょう。

#### ☆ハチを見かけたとき☆

- ①ハチやハチの巣を見かけたら、静かにその場を離れ、大人に知らせる。
- ②手や物で振り払ったり、追いかけてたりしない。
- ③地面にいるハチを見つけたときは、死んでいるようにみえても、生きている場合があるので、絶対に素手では触らない。

ハチに刺される危険は、アシナガバチでは7～8月、スズメバチでは7～10月、ミツバチは通年と言われています。ハチを多く見かける場合は、園舎の周りに巣をつくっていることもあるので確認しましょう。

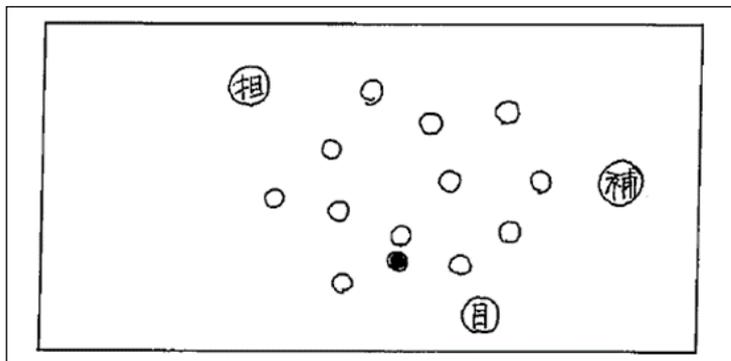
## 事例（2）

[診 断 名] 上唇小帯裂傷

[発 生 日 時] 令和 4年 7月 8日(金) 午後 4時 20分頃

[クラス・性別] 2歳児クラス ( 女児 )

[現 場 図]



現 場 図

担：担当保育士

目：目撃者

補：他の保育士

●：非常勤

○：アルバイト

●：該当園児

○：他園児

[事故発生状況]

ホールで体操をしていた。飛び上がるタイミングで他児の腰と本児の顎が当たり、本児が泣いて痛がっていた。目撃者の保育士が口を確認したところ、前歯のあたりから出血が見られていた。

[応急救護処置の内容]

うがいをして脱脂綿で止血



[事故原因・問題点]

本児とぶつかった他児との距離が近かった。保育士が体操の後半になり集中力が落ちていてふざけ始めている児のほうを気にかけていたため、本児を含めた踊っている児の方をしっかりと見れていなかった。

[その後の改善策]

体操の時には、一人一人の距離を確認し、近い時には声を掛け適度な距離になるようにしていく。また、踊っている最中も保育士が距離を気にかけて、その都度知らせていく。週末で疲れが出てきたり、一つの遊びへの集中力が低下することを予測して、活動時間を工夫していく。遊べていない児には、別の遊びを提案したり、部屋を分かれるなどして落ち着いて過ごせるようにしていく。

[園長意見]

日々の活動の工夫をし、体制などクラス間で連携をとり、計画的に実施している中であったが、ちょっとしたタイミングで接触し、怪我になってしまった。引き続き予測をし合いながら、より安全な保育の工夫を検討し実施する。

～看護師のコメント～

上唇小帯を受傷した事例です。

歩行が安定していない乳児は、転倒時に口を打撲し上唇小帯を受傷することがよくあります。

☆傷の手当てとして☆

- ①受傷部位の状態を確認する。
- ②口唇の上を冷やししながら、圧迫止血する。  
口唇をめくり上げて、ガーゼで止血することは不要で、口から流れ出る血液をガーゼで拭き取る。
- ③うがいができるときは、軽くうがいをさせる。
- ④砂などで口腔内が汚れているときは、下を向かせたまま流水で汚れをとる。

口周囲の打撲は、よく観察しないと気づかないほど、歯が小さく破折(欠ける)していることがあるので、上唇小帯に気をとられることなく、打撲部周囲(歯肉・歯等)を複数名で観察しましょう。



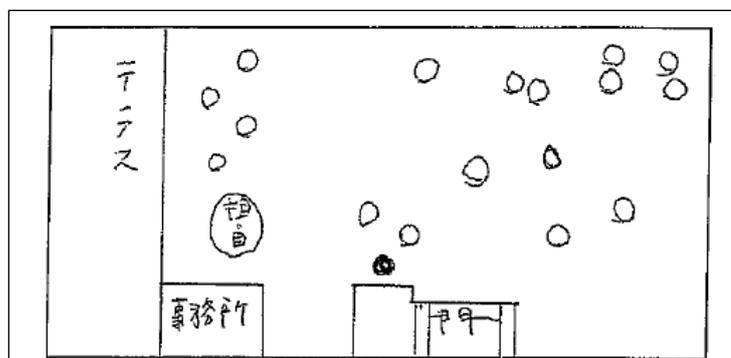
事例(3)

[診断名] 右母指末節骨骨折

[発生日時] 令和4年 7月 12日(火) 午前 10時 00分頃

[クラス・性別] 5歳児クラス (男児)

[現場図]



現場図

⊕: 担当保育士

⊙: 目撃者

⊗: 他の保育士

⊛: 非常勤

⊚: アルバイト

●: 該当園児

○: 他の園児

#### [事故発生状況]

園児 18 名でドロケイをしていた際、鬼から逃げていた本児が通園門付近で転倒し、門柱横の白壁にぶつかりそうになる。白壁に手をつき止まろうとしたが、勢いが強く止まることが出来ず、白壁に手をついた手に頭がぶつかった。

#### [応急救護処置の内容]

患部を洗い清潔にしたのち、冷やしタオルで冷やす。



#### [事故原因・問題点]

多人数での鬼ごっこの最中に白熱し、動きが大きくなり咄嗟の転倒に対応しきれなかった。

#### [その後の改善策]

追いかけてこの際は衝突などの危険があることを子どもたちに伝え、転倒しやすい場所や走り方について自分自身で意識できるようにしていく。また、日常での運動遊びで体幹を育てたり咄嗟の際に対応できる体づくりをおこなっていく。

#### [園長意見]

年齢的にも動きが大きくなり、集団遊びも盛んである。遊ぶ際の約束事などはその都度子どもたちと確認しているが、夢中になってしまうと思ってもよらぬ怪我につながる場合もある。個々発達や性格などよく知り、見守りや援助ができる体制を意識することを全体にも周知する。

#### ～看護師のコメント～

ドロケイで壁に手をついた際に骨折した事例です。

5 歳児は年齢的にも動きが大きくなり、集団遊びも盛んな時期です。頭と壁で手指を圧迫したケースですが、勢いがついていると手をついただけでも骨折することがあります。痛みや腫れ、患部の動きなど、経過観察をしっかりとっていく必要があります。また、痛みがない場合でも、時間の経過で周囲の腫れ・赤み・内出血がみられるときは、複数名で確認し受診しましょう。



# 保育園安全だより

—事故報告より—



令和 4年 10月～12月分

2023年を新たな気持ちで迎えられたことと思います。このところ寒い日々が続いていますが、体調に留意しながら過ごしていきましょう。一時は減少傾向にあった新型コロナウイルス感染症も著しく増加し、またインフルエンザの同時流行と予断を許さない状況にあります。これまでの感染症対策を引き続き行い、保育運営にあたっていくましよう。

## 令和4年度 事故報告書集計 (10月～12月)

	園 内									園 外			計
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	プール	その他	道路	公園	その他	
0歳児	12	0	0	0	0	0	2	1	2	0	0	1	18
1歳児	57	1	1	0	0	7	7	0	4	2	1	0	80
2歳児	30	5	0	0	0	5	21	0	2	1	1	0	65
3歳児	33	12	1	0	0	6	20	0	0	0	0	1	73
4歳児	13	3	0	0	0	1	14	1	1	0	2	0	35
5歳児	20	11	0	0	2	4	26	0	0	0	1	0	64
合計	165	32	2	0	2	23	90	2	9	3	5	2	335

### ～上記集計より～

幼児クラスでは、散歩や園庭であそぶ機会が増え、身体を動かす遊びが多くなったことで、「走っていて衝突した」、「滑って転んだ」などの怪我が多くみられました。0歳児は、お座りの姿勢から立って歩き始めることで身体のバランスが不安定になり、1歳児は、登る、飛び降りるなどの動きが大きくなる時期である為、ぶつかったり走って転倒したりする、という事例も多く挙がっていました。

### ★＝ヒヤリハットや事故報告書を活用していきましょう＝★

ヒヤリハットはどのように活用されていますか。怪我の情報は日々挙げられ、時間・場所・年齢等の傾向を共有している事と思います。情報を共有し、十分に話し合い、対策することで、ヒヤリハットの検証が事故防止につながると考えます。「事故を未然に防ぐ」、「事故を予測する力をつける」という観点から検証方法を今一度、見直してみましよう。事故報告の検証として、現場図から子どもの人数や保育士を目線、死角についてなどを共有することが大切です。子ども達の活動・計画に対して、考えられるリスクについて意見交換を行い、細やかな配慮をして、安全な活動につなげていきましょう。



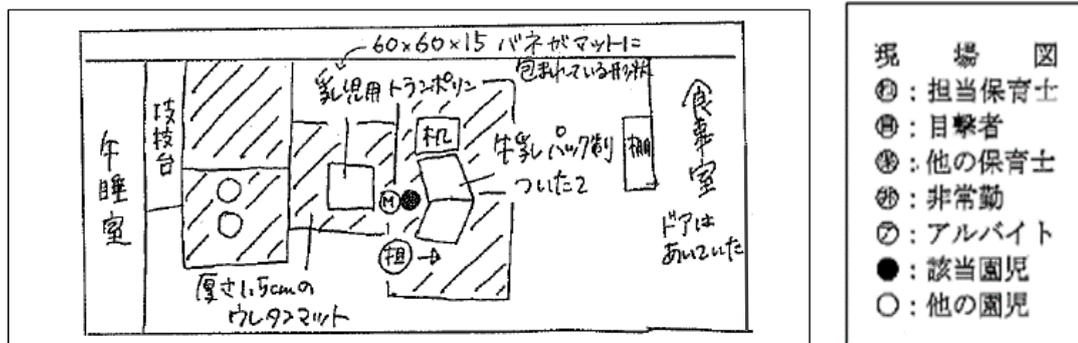
## 【1歳児の運動発達と保育】

### [事例1] 1歳児

#### 〈発生状況〉

事故発生時、室内で園児4名と職員1名で過ごしていた。部屋の中央にある乳児用トランポリンで園児Mが遊んでおり、そのそばで当該園児は順番を待っていた。担当保育士は乳幼児トランポリンのそばについて転倒のないように見守っていた。隣の部屋から声を掛けられ担当保育士が乳児用トランポリンで遊んでいる園児から目を離した直後に泣き声が聞こえ振り向くと乳児用トランポリンで遊んでいた園児Mが該当園児に抱きつく形でマットの上に倒れていた。園児Mが乳児用トランポリンからバランスを崩して転倒し、その際に隣にいた該当児に抱きつく形で倒れたと予想される。倒れた際に後ろに置いていた滑り台として使用した牛乳パック製のL字ついた側の側面に左耳と左頭部を打撲する。

#### 〈現場図〉



#### 〈原因・問題点〉

- ・乳児用トランポリンは不安定なためバランスを崩しやすいことを考慮せず、そばに滑り台が置いてあり設定をする際の安全確保が出来ていなかった。
- ・声をかけられた際に子どもから目を離してしまった。



#### 〈その後の改善策〉

- ・乳児用トランポリンや可動式で遊ぶ時の子どもの動きを予測して転倒しても危険のないようにマットを敷いたり周りに物を置かないように環境設定を工夫する。
- ・保育中に声をかけられても子どもから目を離さずにそばにつく。

1歳児の身体のバランスは不安定であり、歩行の際にも転倒しやすく、乳児用トランポリンを使用して遊ぶ時には、直ぐに支えられる状態が必要です。

このケースは、声を掛けられ、ちょっと目を離した隙に起こった事故でした。1歳児クラスがトランポリンで遊ぶとしたら、まずは、危険を予測した計画が必要でした。今は大丈夫かな、と思っても、リスクを認識して保育士間の声掛けや応援体制など、細やかな配慮をしてリスクを防いでいきましょう

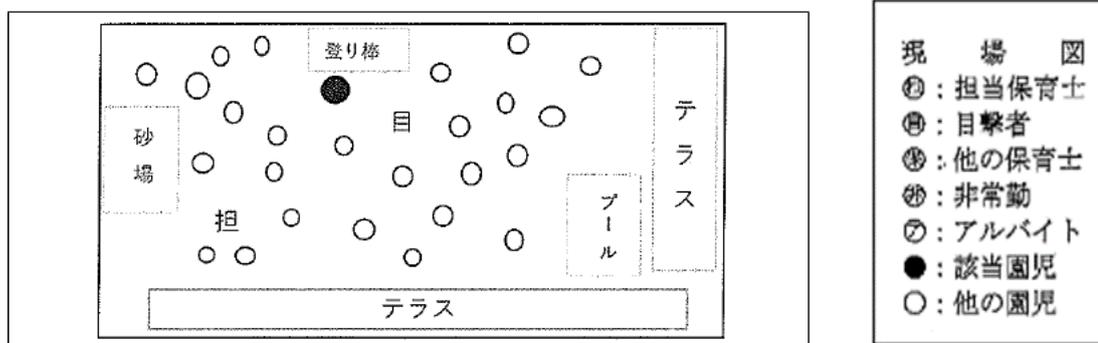
## 事例（1）

[診断名] 打撲

[発生日時] 令和4年9月15日(木) 午後4時00分頃

[クラス・性別] 5歳児クラス(男児)

[現場図]



[事故発生状況]

園庭で4・5歳児がそれぞれ鬼ごっこをして遊んでいた。4歳児は担任保育士と一緒に5・6人で鬼ごっこをし、それとは別に該当児を含む5歳児も5・6人が友だち同士と一緒に鬼ごっこをして遊んでいた。担任保育士は少し離れたところで、全体の様子を見ながら他の児たちと草花の水やりを行っていた。該当児が鬼から走って逃げていたところ、勢い余って前方にあった登り棒に左おでこをぶつける。

[応急救護処置の内容]

患部を確認し、保冷剤を入れた冷やしタオルで30分以上冷やす。

[事故原因・問題点]

4、5歳児がそれぞれ鬼ごっこをして走っている状況だったため、鬼ごっこのスペースの確保が必要であった。また、鬼ごっこの前に、危険箇所や危険行為の確認を子ども達と行うべきであった。

[その後の改善策]

遊び始める前には準備体操を行い、気持ちを落ち着かせてから遊ぶ。また鬼ごっこをして遊ぶ際には、互いの距離を十分にとることや、遊ぶスペースの確保を確実にしていく。併せて子どもたちにも遊び始める前に改めて園庭での約束事(固定遊具の後ろや近辺で走らないことなど)、危険な行為などを知らせ、事故防止に努めていく。



[園長意見]

夕方も積極的に園庭を活用し身体を動かしているが、鬼ごっこの遊ばせ方、子ども達との確認など配慮が足りない点があった。子ども達と範囲を決めて行う、子ども達の様子によっては都度声をかけ、ルール確認を行うなど、細かい配慮が必要であることを確認した。夕方は色々なクラスが使用することもあるため、全

職員で共有した。

～看護師のコメント～

子どもが転倒したり、頭をぶついたりすることは、保育中にしばしば遭遇します。小児は発達上、体の大きさに対して頭が大きく、転倒しやすい特性があります。

頭部打撲後は、必ず複数の目で確認し、経過観察をすることが大切です。頭部打撲した際の処置、観察方法を確認しておきましょう。

また、保冷剤を使用して患部を冷やす際は、直接、肌に保冷剤が当たらないようにタオルなどで包み、冷やしすぎによる皮膚状態の変化に注意し、確認しながら行いましょう。

### 保健マニュアルより抜粋

#### (7)頭を打ったとき

##### すぐに受診が必要な症状(救急車を要請する)



- ・何度も吐く
- ・放っておくとすぐ眠り起こしてもなかなか起きない
- ・顔色が悪く、元気がない
- ・手足の動きが鈍くなった時
- ・バランスが崩れまっすぐ歩けない
- ・けいれん
- ・ぐったりして意識がなくなる
- ・出血が多い
- ・めまい、目が見えにくい
- ・鼻または耳から液体が出ている

①横向けに寝かせ、嘔吐物がのどにつまらないように気をつける

②①と同時に救急車を手配する

見から目を離さず、経過観察・記録し、受診時持参する



#### 傷がある場合(要受診)



①傷の部位と状態を確認する

②圧迫止血し、止血確認後、周囲の汚れをふき取ってガーゼで保護し、脳外科を受診する

※ 受診する際は、破傷風予防接種を受けているか確認する  
(場合によっては、救急車を手配する)

#### 傷がない場合

①打った部分の腫脹の有無や程度を確認し、冷やしながら安静にして様子を見る

②頭以外に傷がないか、観察する

③その後、48時間はなるべく静かに過ごし様子を見る

症状がある場合は、速やかに受診する

④保護者に様子を伝えて、普段と異なる点があれば医療機関を受診するよう説明する

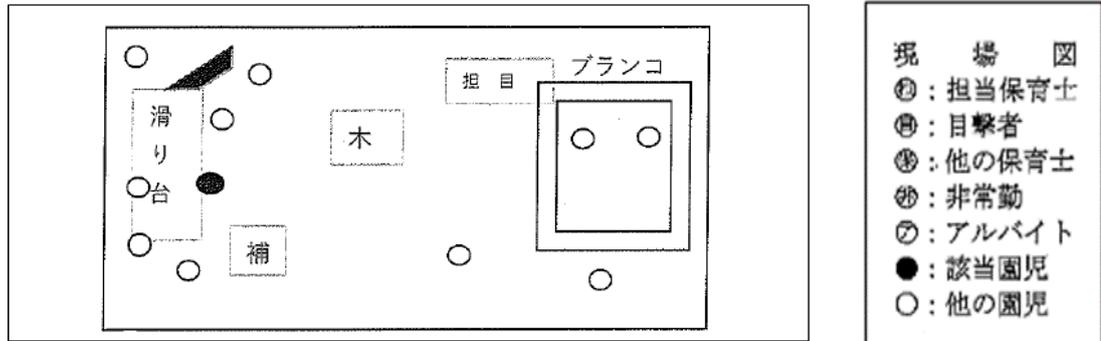
## 事例（２）

[診断名] 切り傷

[発生日時] 令和4年10月3日(木) 午前10時30分頃

[クラス・性別] 4歳児クラス(男児)

[現場図]



[事故発生状況]

大根公園に散歩に出かけた時、該当園児は他の園児7名と滑り台の固定遊具で遊んでいた。該当園児は、滑り台付きの固定遊具の柵上部について台に両手をつき、柵下のステップの隙間に片足をかけてよじ登ろうとした。その際足を滑らせバランスを崩し、両手をついていた台に顎をぶつけて出血する。

[応急救護処置の内容]

傷に砂が入っていないことを確認し、滅菌ガーゼで止血する。  
絆創膏で傷を保護する。



[事故原因・問題点]

- ・保育者間での固定遊具の遊び方の確認が不十分であった。
- ・他の園児が固定遊具内に居たことにより、該当園児も早く固定遊具内に入りたいと急いで登ろうとしていた。
- ・遊具に付く大人の配置、全体の遊びの見守り方などの確認、連携不足があった。

[その後の改善策]

- ・遊具の遊び方(逆からは登らない等)、固定遊具の正しい使用法を知らせ、遊ぶ前に約束事を確認する。
- ・友達とイメージを共有して遊ぶ雰囲気の中で気持ちが高揚することが予想されるので、怪我につながらないように、子どもたちが落ち着いて遊べる言葉かけや、場所の転換を促していく。
- ・大きな固定遊具には正規職員が付き遊び方を知らせていく。会計年度職員に対応を依頼する際は留意すべき点を知らせ、安全に遊べるように認識の共有を行っていく。

## [園長意見]

散歩先の公園は日々利用しており、園児も職員も慣れた場所となっていた。そのため危険予測の意識が十分でなかった。また園児たちは固定遊具の遊び方がダイナミックになってきており、職員全体で園児たちの姿を共有した上で、安全な遊び方を知らせる必要があった。散歩先での職員の配置についても、声をかけ合い見守っていくよう努めていく。

## ～看護師のコメント～

散歩時、公園の固定遊具で打撲し出血した事例です。

普段あまり遊んでいない公園では、思わぬ事故につながる可能性があります。

## ☆傷の手当の方法☆

- ・傷は、まず水で洗いましょう。その上で砂や異物の有無を確認しましょう。園外保育では、行き先によっては、ペットボトルの水や清浄綿を用意しておきましょう。
- ・絆創膏で傷を覆う際は、傷口をきれいにしてから覆いましょう。また、傷を覆ったガーゼや絆創膏は、降園前までに必ず患部の経過を確認しましょう。
- ・保護者には、傷口は、お風呂の時などに泡立てた石鹸やシャワー等で洗ってから、新しい絆創膏を貼るようにお伝えすると良いでしょう。



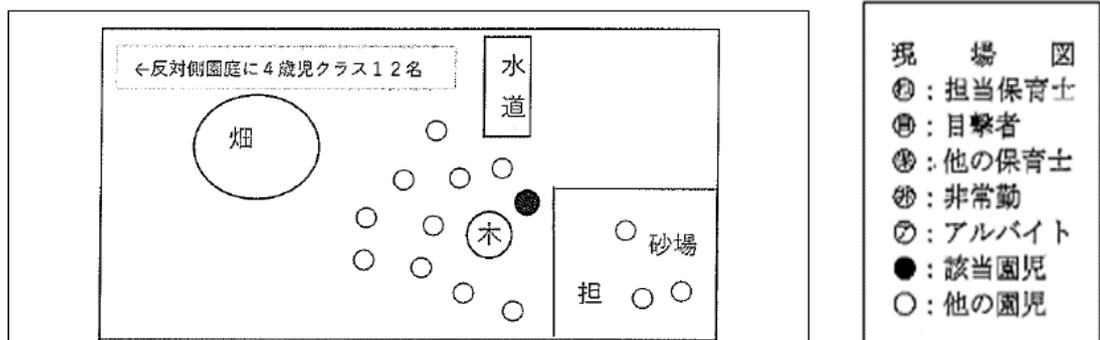
## 事例（3）

[診 断 名] 毛虫かぶれ

[発 生 日 時] 令和 4 年 9 月 26 日(月) 午前 11 時 0 分頃

[クラス・性別] 5 歳児クラス (男児)

[現 場 図]



## [事故発生状況]

園庭で遊び始めようと、該当児が木に何気なく触れた先に毛虫がついていた。「先生、何か刺された。」と、近くにいた保育士に自分から知らせる。

## [応急救護処置の内容]

流水でよく洗い、棘は目視できなかったが、念のため、粘着テープで棘をとり、冷やす。

#### [事故原因・問題点]

時期的に園庭の木に毛虫がついている、という可能性があることを周知・対策していなかった。

#### [その後の改善策]

- ・自然物には、虫等危険なものがあることを知らせ、手で触れる際には目視するよう声をかけていく。
- ・園庭で遊ぶ際、保育士が安全かどうか確認していく。



#### [園長意見]

毛虫に刺されたとの報告を受けて、その毛虫を携帯で検索すると「イラガ」であることがわかった為、応急処置と並行しながら受診の準備を進める。受診の結果刺されてはいなかったが毒性があるとのことで、すぐに区立保育園運営に連絡を入れ、害虫防除作業実施(9/29) 今後も毛虫が発生しやすいシーズンには通常以上に樹木の確認を行い早期発見できるよう取り組んでいく。

#### ～看護師のコメント～

毛虫に触れて、適切な処置から受診へと対応した事例です。毛虫の被害を防ぐためには、環境点検と園児への声掛けをし、すぐに触らず大人に知らせるように伝えましょう。

#### ☆毛虫に触れたときの対応☆

- ・患部に残っている毛虫の毛を、できるだけ早く粘着テープ等で除去します。
- ・毛虫の毛が衣服に付いている可能性があるため、他の部位に付かないように衣服を着替えます。
- ・泡立てた石鹸を付けた後、流水で洗浄し、適時患部を冷やしましょう。
- ・皮膚科を受診しましょう。

毛虫の一部には、身体に有毒な毛をもつものがあり、これらに直接触ったり、風に飛ばされてきた毛に触れたりすることで、皮膚に痛みやかゆみを伴う湿疹が現れることがあります。症状や対処方法、予防方法を確認しておきましょう。

# 保育園安全だより

—事故報告だより—

令和5年1月～3月

日ごとに春の日差しが増して過ごしやすい季節になりました。コロナ感染症も落ち着き、私達の日常も穏やかに明るさも戻ってきたように思います。

令和4年度、1月から3月20日までに提出された、「事故報告書」の集計がまとまりましたので報告致します。(令和5年3月20日保育課到着分)

令和4年度 事故報告書集計 (1月～3月)												
	園内								園外			
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	その他	道路	公園	その他	計
0歳児	10	0	0	0	0	1	2	3	0	2	0	18
1歳児	43	0	0	0	0	13	7	4	2	4	1	74
2歳児	10	10	1	0	1	0	20	1	1	0	2	46
3歳児	12	8	2	0	1	4	31	3	0	1	1	63
4歳児	20	6	2	0	2	2	28	0	0	1	0	61
5歳児	18	6	0	0	0	0	22	0	2	4	0	52
合計	113	30	5	0	4	20	110	11	5	12	4	314

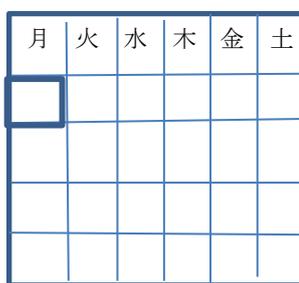
## 【ヒヤリハット・リスクを軽減するための取り組み】

ヒヤリハットの取り組みを様々に工夫し活用していることと思います。怪我を少なくするにはどうしたら良いかを話し合い、記入がし易い仕組みを作り、事故を減らすことにつながった園の取り組みを紹介します。

- 1、ヒヤリハットを絵カードに記入して週のカレンダーに添付する。
- 2、転びやすい、何回も怪我をし易いなどの一人ひとりの傾向を知ることができる。(保育中にどのような配慮が必要か分析を丁寧に行う。)
- 3、クラス、時間、名前、場所、受傷内容などヒヤリハットカードの内容を分析する。
- 4、リスクマネジメント委員会で集約して統計結果を職員間で情報共有を図る。



ヒヤリハットカード



月～土の週カレンダー

- ・月1回の「リスク会」
- ・「園内パトロール」で園内外の安全点検

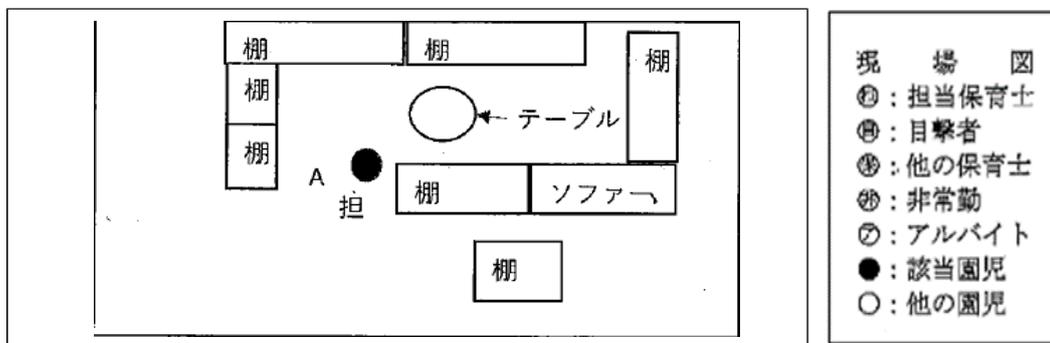
## 【午睡をしない園児の保育】

[事例1] 3歳児

〈発生状況〉

該当園児が、ままごとコーナーにある化粧品などの容器を棚から数個出してテーブルの側で保育士と遊び、少しその場を離れた。その様子を見た A 児が興味を示し該当園児の容器を手に取り遊び始めた。該当園児は自分が使っていた物を取られたと思い、A 児に「返して」と伝えてほしいことを保育士に訴えた。保育士が該当園児に対し一度手を放してしまった物は友達が使ってしまうこともあるよと伝えた。二人とも素足で遊んでいたこともあり、先に上履きを履いた人に渡すと話し、先に履いた A 児に保育士が容器を渡した。その後、該当園児が泣き A 児に向かっていこうとする姿があり、保育士は落ち着かせるために側についていた。A 児は、容器が自分の物になったものの一度取られたことに対し嫌な気持ちがおさまっておらず、ままごとのフライパンで該当園児の顔をたたいてしまい該当園児の右目じりから出血する。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

該当園児、A 児両方の気持ちがすっきりしていない状況で A 児から離れてしまった。その際に保育士は A 児に背を向けていたため A 児の状況を把握できていなかった。そのため動きも予測しきれず止めることができなかった。また容器をどちらかに渡せば気持ちが落ち着くはずという思い込みで該当園児の対応にあたっていた。



〈その後の改善策〉

保育士が子どもの普段の姿を理解し関わり、子どもの気持ちを考え受け止めながら信頼関係を築いていく。また子どもに背を向け、子どもの動きが見えなくなることがないように立ち位置など工夫していく。

事例1は、午睡をせずに別室で保育をしていた際に起こった事故です。お昼寝をしない子ども達の対応を各園どのように考え保育していますか？ 生活や活動の場面で子ども達の主体性を大切にしながら保育展開をしていく中で、このケースは子どもの気持ちに“どのように寄り添えばよかったのでしょうか？” “当事者園児2名が納得できるように保育士はどんな援助をしたら良かったのでしょうか？” 今後、午睡を必要としない園児や早く目覚めた園児の保育をどこで誰が 何に注意して安全な保育をしていくのが適切なのか、是非各園で話題にして話し合ってみましょう。



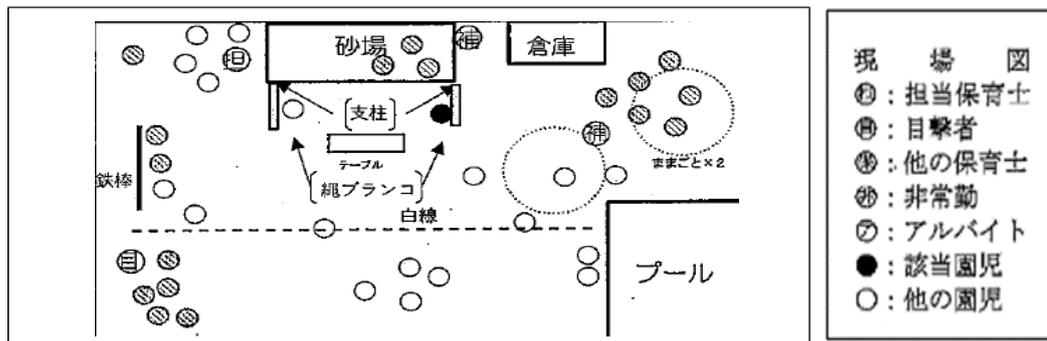
## 【園児人数に適した遊びの環境】

[事例2] 4歳児

〈発生状況〉

4・5歳児クラス全員が園庭で一緒に過ごしていた。該当園児は、友だちと向かい合うようにしてブランコを楽しんでいた。(カバーの無い支柱側) 後方に該当園児のブランコが揺れたタイミングで、後ろを走り抜けようとした5歳児が接触した。驚いた該当園児が急に止まろうとして足を着き、ブランコの綱を持ったままの状態ではバランスを崩し、体が回転しながら支柱に左おでこをぶつけた。

〈現場図〉



〈原因・問題点〉

「友だちと同時に乗りたい」という子どもの要望に応え、以前の事故を踏まえて支柱にカバーを付けたにもかかわらずカバーの無い支柱を使用してしまった。ブランコの可動域の安全確保ができていなかった。子どもへの注意喚起(ブランコに近づかない等)が不足していた。遊び毎(動的遊びか静的遊びか)のエリア分けができていなかった。ラインで区切っていた部分もあったが守られていなかった。

〈その後の改善策〉

支柱全てにカバーを付ける。ブランコのエリアの確保(後方についても入れないように設定、仕切りを使っていく)。ブランコについての約束事を保育士・子ども双方に再確認する。遊びのエリア分けを明確に確実にやっていく。

事例2は、1か月前にも同じ場所で同様の事故があり、支柱カバーを付け、ブランコに乗る時の注意点を全職員で確認しましたが、今回子どもの要望によりリスクを解っていないながら大丈夫だろうと思い遊びを進めてしまったケースです。異年齢の子どもたちが大勢いる中でのブランコ遊びは適切だったのか? 又、子どもたちへの意識づけや周りの職員への注意喚起をすることなどの細かい配慮についても丁寧に再考する必要があります。



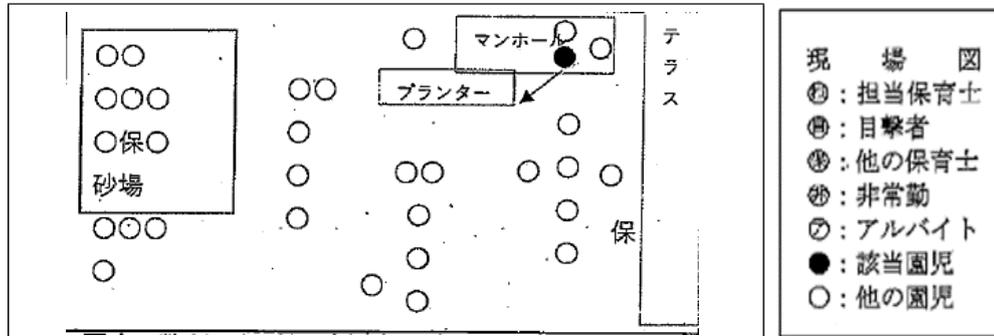
## 事例（１）【受診する前の傷の手当】

[診 断 名] 擦過傷

[発 生 日 時] 令和４年１２月７日(水) 午後４時１０分頃

[クラス・性別] ５歳児クラス ( 男児 )

[現 場 図]



[事故発生状況]

園庭で数名の年長児が鬼ごっこをして遊んでいた。マンホールの上に逃げていたが、鬼の児が来たため逃げようとした際、段差でバランスを崩して転倒。転倒先にプランターがあり、顎をぶつける。

[応急救護処置の内容]

流水で洗う。病院に電話したところ石鹸で洗った後ワセリンを塗ってガーゼで覆うようにという指示があったので従う。

[事故原因・問題点]

事前に安全に遊ぶように話していたが、行事の前日ということで気持ちの高揚があったと思われる。

マンホール付近は危険という認識はあったが、他児に対応していたためマンホール付近で走っている児に声をかけることができなかった。

[その後の改善策]

行事前日の夕方は気持ちが高揚するため、どのように遊んだらよいのかを遊び始める前に子どもたちと確認していく。

安全に遊ぶことのできるように再度園庭の使い方について走ると危険な場所などを子どもたちと確認していく。

[園長意見]

この日は午前中普段より外遊びの時間が短く、身体を動かしたいという気持ちがあったと思われる。また、発表会前日夕方は気持ちが高揚しやすい。行事前日だからこそ、いつも以上の配慮をしていかなければならないことを職員と確認した。

～看護師のコメント～

事例のケガは医師からワセリンを塗布してから受診をする指示が出ていますが、受診をする場合、患部の状態を診るので軟膏などの塗布は基本的に塗らないでそのまま受診しましょう。傷口はまず洗い、止血後清潔なガーゼで保護した状態で受診しましょう。

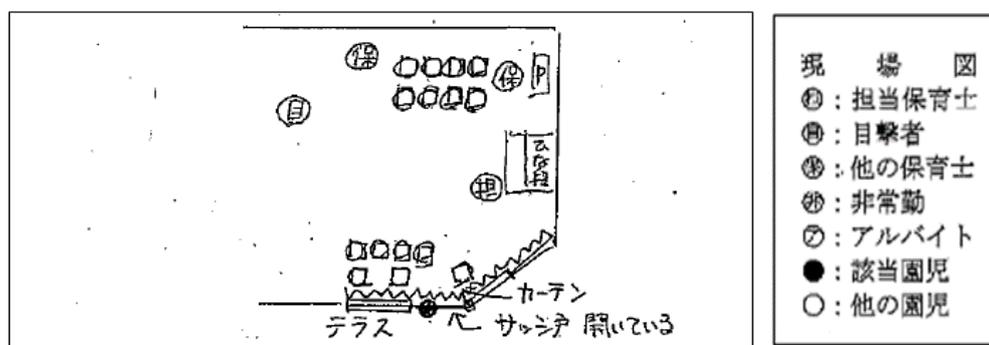
## 事例（２）【歯が抜けてしまったときの対応と患部の応急処置】

[診 断 名] 歯の破損、脱臼、歯茎裂傷

[発 生 日 時] 令和4年11月29日(火) 午前11時10分頃

[クラス・性別] 5歳児クラス ( 男児 )

[現 場 図]



[事故発生状況]

劇遊び中。ホール中央での演技を終え、自分の座席に歩いて戻る。椅子に座るときに、椅子の位置を確認しないまま勢いよく腰を下ろす。そのまま尻をついて左方向に後転するようにひっくり返る。その際、後ろのサッシ戸が開いており、ひっくり返った勢いでサッシのレール部分に口元を思い切りぶつける。口元から出血、歯が1本抜け落ちる。

[応急救護処置の内容]

- ・流水で口をすすぎ、口元を冷やす。
- ・抜けた歯は牛乳に入れる。

[事故原因・問題点]

- ・換気のためテラス側にサッシ戸を開けていた。椅子に座り損ねた際、戸が開いていたことで後ろに背もたれがなく、ひっくり返る勢いが増すとともにサッシのレール部分に口元をぶつける原因にもなった。
- ・劇の舞台側であったためカーテンを閉めていた。そのカーテンによってサッシ戸が開いている場所も見えず受傷した瞬間も見えにくくなってしまった。
- ・直前までは保育士が座席の側にいたが、場面転換のためにその場を離れていた。

[その後の改善策]

- ・普段と違った雰囲気の中ではどの児も気持が高揚しやすいことが予想される。子どもの様子をよく理解し、落ち着いて着席するまで保育士が傍らで見守る。

・サッシ戸を閉めていれば防ぐことができていた事故であった。カーテンを閉める際にはサッシ戸を閉め、別の場所から換気をするようにする。

#### [園長意見]

椅子に座り損ねての事故だが、様々な状況が重なったことで、大きなケガに繋がってしまった。発表会の練習を他クラスも見に来ており、子どもたちも張り切っていた。そういったときにこそいつもなら起らないようなことが起こることもあると想定して環境を考え、対応することが大事だと全体で確認した。

#### ～看護師のコメント～

歯の損傷の事例です。抜けた歯を牛乳につけて受診しており、適切な応急処置を行っています。歯を洗わずにそのまま牛乳に入れることは歯根膜を破壊せず、乾燥を防ぐことができます。歯の救急保存液も市販されていますので、常備しておくのもよいでしょう。(使用期限2年程度、2000円台) もし牛乳アレルギーがある児や牛乳がない場合は、歯根部が乾かないようにそのままラップ等に包んで受診しましょう。また幼児クラスの場合は歯の生え変わりの時期でもあり、乳歯なのか永久歯なのか、もともと歯のぐらつきがあったのか本人にも話を聞きながら把握することも大切です。

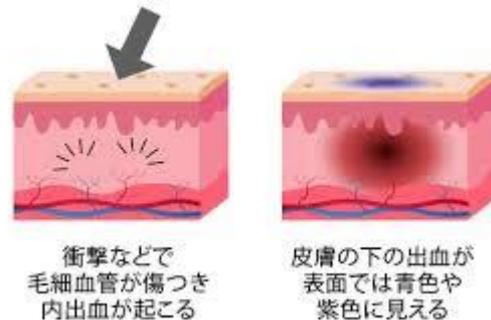
#### 【患部を冷やす目的】

- ・表皮の下（内出血）の出血を止血したいとき
- ・痛みがあり疼痛除去のため

#### 【冷やす方法】

- ・流水に患部を当てる
- ・冷やしたタオルを患部に当てる
- ・氷水で患部を冷やす

\*冷やしすぎると凍傷を起こしてしまう可能性もあるため20分以上冷やさなければいけないときには受診をしましょう。また、冷やしたタオルは清潔ではありません。傷がある場合は、傷に絆創膏やガーゼを当て、タオルはビニール袋などに入れ、傷が濡れないようにしましょう。





# 保育園安全だより

—事故報告だより—



号外(令和4年度 最終号)

例年より早い新緑が心地よい4月、新型コロナウイルス対応も含め安心・安全な保育運営を目指して新年度を迎えられたことと思います。子ども達や職員にとっても新しい環境でワクワクドキドキしながら日々過ごされていることでしょう。

この時期、子ども達は気持ちの高揚感から思いがけない事故や怪我につながる事が予想されますので、職員の皆様も誰かが見ているだろうと思わず互いに声を掛け合い責任をもって子ども達の生活を見守っていきましょう。

令和4年度 年間事故報告書集計表

	園内									園外			計
	保育室	ホール	廊下	玄関	トイレ	テラス	園庭	プール	その他	道路	公園	その他	
0歳児	44	0	1	1	0	6	5	1	5	0	3	1	67
1歳児	183	3	3	0	1	29	25	0	9	6	7	2	268
2歳児	96	23	1	0	1	13	66	0	7	4	4	3	218
3歳児	78	32	5	0	2	16	84	0	3	1	2	3	226
4歳児	61	15	4	0	3	13	75	1	2	0	6	0	180
5歳児	67	29	1	0	3	7	91	0	0	4	9	1	212
合計	529	102	15	1	10	84	346	2	26	15	31	10	1171

## 【集計表より】

令和4年度に発生した事故件数は 1171件 でした。昨年度より 168件 の増加でした。特に、1歳児クラスの怪我の件数が大変多いことがあげられます。保育室の環境を整えることや職員間の声を掛け合うなどの工夫が必要になります。新年度がスタートし、様々な環境の変化などで事故が起きやすい時期です。子ども達が心身共に元気に過ごせるよう安全対策を整えましょう。

## 「受診の判断」

- ・怪我をした時には身体の様子を詳しく観察し、受診の判断は複数でしましょう。
- ・顔や首から上の怪我、傷、歯損傷等迷ったら受診をしましょう。
- ・事故発生時は、迅速に事実関係を把握し、保護者に連絡を入れ、発生状況やその後の対応について十分に説明を行いましょう。

## 安全だより（最終号）

### 0歳、1歳クラスの起こりやすい怪我

- 1、這い這いで移動して、おもちゃ取り、立ち上がって歩き出したときにバランスを崩す。
- 2、少人数で保育中、保育士が少し目を離した隙におもちゃの取合いが起きて仲裁に入った。一旦は収まったかのように見えたため、その場を離れたが、他の子が使っているのをみて自分が使っていたと相手をひっかく。
- 3、床に敷いていたマットにつまずきバランスを崩す。
- 4、四つん這いで階段を昇り降りする際に、手足のバランスを崩して転倒。
- 5、コンビカーに乗っていてバランスを崩しての転倒。



### 2歳、3歳クラスの起こりやすい怪我

- 1、1度遭ったトラブルを保育士が気持ちを汲んで対応し、収めたつもりになっていたが、消化し切れておらず再度トラブルになった。
- 2、年度の後半、身のこなしが巧みになってくるが、まだ自分の目の前のことに神経が集中すると周囲が見えなくなってしまう、人や物に衝突する。
- 3、友達との関係が出てきて、言葉で伝わりきらず手がでてしまう。
- 4、生活の切り替えの場面。（片付けをする子ども同士のトラブル、次の活動や食事、お茶の準備などに動く保育士の目が外れる瞬間など）
- 5、子どもの特性の把握と対応策に加えて、年度後半に「落ち着いてきたから」「よく遊んでいたから」と安心して目を離してしまう。
- 6、新年度に向けて、乳児担当と幼児担当の入れ替えをして保育を行い、慣れない環境で起きる。



### 4歳、5歳クラスの起こりやすい怪我

- 1、園庭で多人数の中で、ルールのある遊び（鬼ごっこ、サッカー、ドッチボールなど）を展開して起こる。年度の後半、子どもの成長に伴い、スピードが出て、夢中になり周りが見えなくなってしまう動き。
- 2、ビールケースやベンチ、タイヤなど不安定な可動式遊具を使っでの遊びでバランスを崩す。
- 3、遊びたい素材を使っているとき、素材の扱い方。
- 4、室内のテーブルとテーブルの狭い空間に手をつき身体を浮かしてバランス崩す、椅子につまずく、距離感の誤りなど。
- 5、園庭での多人数の中での縄ブランコでの接触事故。
- 6、発達に合わせた午睡時間の調整により日中の活動が変化したとき。



◎事故報告書は事故発生後、1週間をめどに提出をお願い致します。